

「マージナル・マン」としての米国日系二世  
— 戦前・戦中期における留日学生を中心に

森 本 豊 富\*

**The American Nisei as Marginal Man:  
The Nisei in Japan in the 1930s and 40s**

Toyotomi Morimoto\*

**Abstract**

A socio-psychological notion of “marginal man” was advocated by Robert Park in the late 1920s and developed by Everett Stonequist in the early 1930s. The concept of marginal man consists of racial hybrids as well as cultural hybrids in which immigrants, particularly the second generation immigrants, are included. In this article, by utilizing marginal man concept, I examined second generation youths of Japanese descent in the United States, especially those who went to Japan for study in the 1930s and were stranded there during the war period. Along with a brief sketch of Nisei and foreign students in prewar-Japan, this article deals with marginal personalities of a few Nisei in Japan, by examining their personal accounts, letters and an interview.

はじめに

1930年代半ばから1940年代半ばにかけての10年間は、時代の荒波に翻弄された米国日系二世を象徴的に物語る波瀾万丈の時代であった。10万人余の日系人が米国籍の有無を問わず鉄条網の内側に収容された強制収容所体験、祖国アメリカへの忠誠心を血で証明せざるをえなかった二世部隊442連隊の犠牲と功績、また、対米宣伝放送にかかわった容疑で反逆者のレッテルを貼られた「東京ローズ」等々、太平洋の東西いずれに身をおいても日系二世は数奇な道のりを歩む運命にあった。

米国に生を受け、米国籍も得ながらその出自ゆえにセカンドクラス・シチズンとしての地位を余儀なくされた二世は、社会心理学用語「マージナル・マン」の定義に適合する。それは、生まれ育った米国の地においても、「祖国」日本に「回帰」してみても、言語的・文化的差異ゆえにマージナルな立場におかれる運命にあったからである。

本稿では、マージナル・マン概念の視座から第2次世界大戦前後の留日米国日系二世を照射する試みを行った。いわゆる「第二世問題」とは何だったのか、また、当時の留日学生はどのような状況下にあったのかについて概観するとともに、留

---

\*人間健康科学科

\* *Department of Human Health Sciences*

学体験者の手紙、回想記、インタビュー等をもとに1930年代、40年代における留日二世のマージナル・マン的位相を明らかにしてみたい。

### マージナル・マン

「境界人」、「周辺人」、あるいは「限界人」と訳される「マージナル・マン」という社会心理学概念は、ジンメルジンメルの *Der Fremde*（「異人」、「異邦人」、「よそ者」）観を拠り所にして、ロバート・E・パークが提唱し、弟子のエベレット・ストーンキストが発展させた<sup>1</sup>。マージナル・マンとは、二つ以上の異質の社会圏に同時に属しているか、あるいはそれらの狭間に位置し、いずれにも十分に帰属できない人間をさす。このため、マージナル・マンは、情緒不安定で内面的葛藤がはげしく、自我が分裂し、自省的で厭世的でもある。また、いずれの集団にも過剰に同調する傾向もみられる。しかし一方で、物事を客観視し、相対的に啓蒙され、合理的な判断を下す可能性も秘めている<sup>2</sup>。

赤坂憲雄は『異人論序説』の中で、マージナル・マンを「異人」という大きな枠組みの中でとらえた。「異人」とは、ジンメルによればどのような空間からも解放された遍歴的な側面と、その反対概念である定住の両方の概念をあわせ持つ両義的な存在とされている。赤坂は、このジンメルジンメルの異人説をもとに、異人のカテゴリーの中に含まれる人々を次の6種類に区分している。(1)一時的に交渉をもつ漂流民（サンカ、遊牧民、浮浪民、日本中世の遊行聖、遍歴職人、土着以前の行商人、遊女うかれめ、小屋掛けの芝居一座、遍路乞食など）；(2)定住民でありつつ一時的に他集団を訪れる来訪者（行商人、旅人、巡礼、赴任先の学校教師、海外派遣の商社マンや宣教師、疎開地の都会っ子など）；(3)永続的な定住を志向する移住者（移民、亡命者、他部族からの婚入者、嫁、養子、継子、継母、地域社会への転入者、転校生、閉鎖的なクラブへの入会志願者、新生児など）；(4)秩序の周縁部に位置づけられたマージナル・マン（狂人、精神病患者、身体障害者、非行少年、犯罪者、変人、怠け者（労働忌避者ないし不適格者）、兵役忌避者、売春婦、性倒錯者、病人、アウトサイダー、異教信仰者、独身者、未亡人、孤児など）；(5)外なる世

界からの帰郷者（帰国する長期海外滞在者、故郷へかえる出稼ぎ者、復員兵、海外帰国子女、帰国後のロビンソン・クルーソー、発見された旧日本兵など）；(6)境外の民としてのバルバロス（未開人、野蛮人、エゾ、アイヌ、土蜘蛛、隼人、山人、鬼、河童など）<sup>3</sup>。赤坂の区分けでは、マージナル・マンはあまりにも限定され、かつ否定的なイメージがつきまとう。本稿で扱うのは日本に留学した米国日系二世であるから、赤坂の区分けで特に留学生についての言及はないが、(2)「定住民でありつつ一時的に他集団を訪れる来訪者」に近い個人といえよう。

ストーンキストは、マージナル・マン概念に関する集大成ともいべき書『マージナル・マン―パーソナリティと文化摩擦に関する研究』(*The Marginal Man: A Study in Personality and Culture Conflict*)において、マージナル・マンを人種の雑種(racial hybrid)と文化的雑種(cultural hybrid)の二種類のタイプに分け、それぞれについて世界の諸民族から事例を提示している。前者については、インドにおける欧亜混血(*The Eurasian (Anglo-Indians) of India*)、南アフリカのケープ黒人(*The Cape Coloured of South Africa*)、米国における白人と黒人の混血(*The Mulattoes of the United States*)、ジャマイカの黒人(*The Coloured people of Jamaica*)、ジャワのインドーヨーロピアン(*The Indo-Europeans of Java*)、ハワイの混血(*The Part Hawaiians*)、ブラジルのメティス(*The Métis of Brazil*)などであり、後者についてはヨーロッパ文化の拡散(*The diffusion of European culture*)、欧化されたアフリカ人(*Europeanized Africans*)、西洋化された東洋人：インド(*Westernized Orientals: India*)、ユダヤ人、移民、二世、米国の黒人などについてである。したがって、ストーンキストのマージナル・マン概念は、多くの点でジンメルジンメルの提唱した「異人」概念と重なり合っているといえよう。ただし、ジンメルジンメルの「異人」説との違いは、異人は様々な社会集団に見られる関係概念を説いているのに対して、マージナル・マン概念は、主に異民族間の接触によって起こる状況、特に人種の雑種や移民といったコンテ

クストに焦点を絞っている点にある。また、マージナル・マン概念は、これらの集団間の力学そのものを扱ったものではなく、境界線上に存在する個人のパーソナリティの類型化に重点が当てられている。この点は、ストーンキストが段階的に区分しているマージナル・マンのライフサイクル（生活周期）に典型的にあらわれているといえよう。

ストーンキストは、マージナル・マンは次のようなライフサイクルを経ると考えた。(1)準備段階：個人は、文化の葛藤を内面的問題として直視しておらず、したがって心理的葛藤を生まない無意識の状態にある；(2)危機的段階：ある経験を通して文化的葛藤を自覚し、二つの自我にさいなまれ、不安定な分裂したパーソナリティの状態に陥る；(3)第2段階を受け継ぐ持続的段階としていくつかの方向に分化：(a)上位集団に接近し、その成員となりマージナル・マン的特性を失う；(b)下位集団に残り、その指導者的立場（革命家、改革者、教師等）になる；(c)孤立化し、他の地域へ移住する；(d)マージナル・マンが大きな集団（マージナル・カルチャー）を形成し、その構成員になることによってマージナル・マンの特徴を失う；(e)個人の才能を芸術や科学の分野で発揮することにより衝動や欲求を昇華させ、問題提起することによって解決をさぐる；(f)自己分裂化し、精神病、犯罪、自殺などに陥る<sup>4</sup>。すなわち、マージナル・マン概念は、「社会構造のマクロな変動過程がいわば個人のパーソナリティの次元に投影されたもの」である<sup>5</sup>。ストーンキストの類型化は、様々なマージナル・マンの事例を観察していくときに有用である。折原浩は、マージナル・マンのライフサイクルにおける諸段階において人間が立つことになる諸状況を詳細に記述し、社会的、歴史的条件がどのように投影されてくるか、また、マージナル・マンがさまざまな方向に分かれてゆくとき、この方向分化を規定する諸要因は何か、というような問題を具体的に検討してゆくことを提言している<sup>6</sup>。

本稿では、米国日系二世の中でも、留学生という形で戦前・戦中に日本に滞在した二世をとりあげるわけだが、留学生一般についても、永井道雄

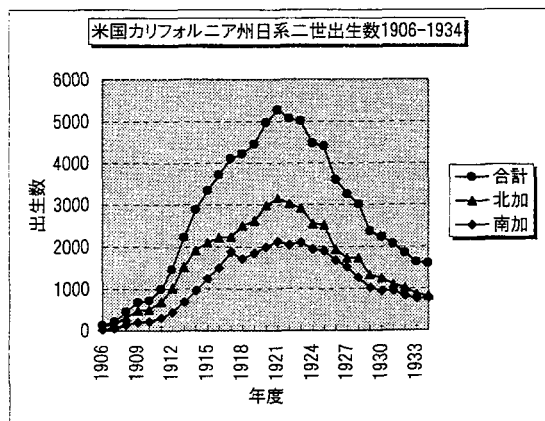
はこのマージナル・マン的パーソナリティをあてはめて考えた。彼は、世界の留学史を見ると、そこに留学の不思議な「成果」があることに気づいた。すなわち、留学生が留学先の批判者となってしまう点である。英国に学んだインド人学生は反英主義者として祖国解放の士となり、戦前日本に学んだ中国人留学生の中から周恩来に代表される抗日指導者が出、米国に留学した各国の留学生に反米感情を抱くものも少なくない。こういった受入側の期待とは逆の効果が生まれる理由には、時代背景、帝国主義、植民地主義など政治・経済的背景を無視できない点は認めているものの、永井は、留学そのものの学習過程の中に含まれる緊張した力学の存在の重要性を指摘している。留学生の使命は、留学先の言語、文化、習慣、技術などを修得することにある反面、その文化への同化さらには帰属は避けねばならないという意識がたらく。即ち、「同化と離反、依存と独立、留学の過程には必然的にこれら対立する原則のあいだの緊張がおりこまれている」と永井は主張する<sup>7</sup>。短期間で相手国の言語、文化等を身につけ成果を出すことへの期待から「強制的順応(Compulsive Conformity)」をする反面、帰国を前提とするために「強制的離反(Compulsive Alienation)」という作用も同時にはたらく緊張関係であると指摘する。そして、このような立場にある留学生は、一時的ながらも「境界人」とであると述べている。とすると、留日日系二世は、二重のいみでマージナル・マン的状况におかれていたことになる。「文化的雑種」としての、また留学生という立場での境界線上の二世は、戦時下という特殊な環境にあって何を体験し、何を思っていたのだろうか。以下、二世をとりまく社会的、歴史的諸条件としての戦前期における「第二世問題」及び留日学生の推移と状況に関して概観した後、現存する文献およびインタビューの中から事例をとりあげて、これら諸条件がどのように二世の生き方に投影され、彼らの方向分化を規定したのかについて検討してみたい。

## 第二世問題

19世紀末から始まった日本人の渡米は、官費・

私費留学生時代、出稼ぎ労働者時代を経て、1910年代に増加した写真結婚によって妻帯者が増加し、二世の誕生も1920年代前半にピークをむかえた(表1参照)。

表1 米国カリフォルニア州日系二世出生数1906-1934



出典：外務省外交史料館「日系外人関係雑件」K.1.1.0.9.より作成

したがって、多くの米国本土における日系二世のベビーブーマーたちは、日米開戦時前後に成人をむかえた計算になる。1930年代には、一世の関心は、教育、二重国籍、結婚、就職といった二世の成長とともに起こる「第二世問題」に奪われていった。一世の指導者あるいは日本で二世の教育にかかわった人物の多くは、二世に対して、来る「太平洋時代」に「東西融和の架け橋」としての役割を期待した。例えば、日本における二世の受入教育機関のひとつであった早稲田国際学院で主事をした名取順一は、次のように述べている。

大舞台、太平洋を挟む強国は日本と米国であり、東西文化を渾然と総合させる独一なる役割を担当すべき者はこれ日系第二世である。太平洋時代の活躍児とは日米両国を知る日系第二世なりとの理想を消えゆく夢となすなかれ。日米両国親善の平和橋、東西文化の融和者、汝の天職を忘却するなかれ。(中略)米国の美を日本に移植せよ、日本の魂を米国に教えよ。光輝ある日昇る国に学ぶ特権を記憶せよ<sup>8</sup>。

しかし、理想を離れて現実に目をむけると、二世は家庭、国籍法、結婚、就職等の局面で多くの問題に直面しつつあった。まず、家庭内では、日本語・日本文化を引きずる一世との間に意志疎通の溝を深めていく一方であった。日米の国籍法の違いによる二重国籍問題は、兵役義務、忠誠との関わりで排日運動家の攻撃対象となった<sup>9</sup>。結婚については、二世女性が先に適齢期をむかえ、相手となる二世男子の経済的自立が間に合わなかった点が根本的な問題となった。また、一世は日本の伝統的礼儀作法を身につけた家庭的な女性を望み、二世男子の多くも親の抱いていた女性観を踏襲した。このことが、二世女性の日本留学への大きな要因ともなった。また、就職問題は、成人した二世に最も深刻な影を投げかけていた。1929年の大恐慌以来続いた不景気の最中で、とくにマイノリティー集団の二世に対する風当たりは強かった。有名大学を優秀な成績で卒業しても、実際の能力と就職機会は無関係であった。米国本土では、99パーセント日系社会内でしか就職は不可能であると言われ、一流大学を出て倉庫番になったり、「人参磨きのプロ」以上の職をみつけることは困難であった<sup>10</sup>。

日米開戦直前から戦中、戦後にかけての二世大学生については、ロバート・W・オブライエンの『第二世大学生』(The College Nisei)に詳しい記述がある<sup>11</sup>。オブライエンによると、1941年、日米開戦の年に二世の大学進学は頂点に達した。当時3,530人が全米の大学に籍を置き、西海岸諸州が92.3%で、中でもカリフォルニア州が全体の7割以上を占めた<sup>12</sup>。日米関係の悪化がより鮮明になってくるにしたがって、在学二世は、他州の大学に移籍することを盛んに勧められたが、実際に強制収容以前に移籍したのは216人に止まった。しかし、戦時中にかなりの割合で二世の大学生が収容所を出て、西海岸以外の地域の大学に移籍した。オブライエンは、真珠湾攻撃以前、二世が籍をおいていた西海岸以外の地域の大学は98校であったのが、1943年6月には269校、1945-46年の学年暦では378校に急増した調査結果を示している<sup>13</sup>。

以上、1930-40年代の米国日系二世の状況を概観したわけであるが、それでは日本留学をした二世

はどのような状況にあったのだろうか。留日学生の推移とあわせて検討してみたい。

### 留日学生

近代日本への留学は、1896年（明治29年）3月、清国から来日した13名の留学生在が、その嚆矢と言われている。当時の駐日清国公使に依頼された外務兼文部大臣であった西園寺公望は、13名の教育を高等師範学校校長の嘉納治五郎に一任した。しかし、この留日学生の開拓者たちの中には、日本における差別やカルチャーショックに耐えきれなく、わずか数週間で帰国した者もあり、結局首尾よく卒業できたのは7名であったという。しかし、その後中国からの留学生は急増し、1899（明治32年）年には200名を超え、1902年（明治35年）には4-500名、1903年（明治36年）には1,000名、そして1906年（明治39年）には、8000名、一説には1万から2万いたともいわれている<sup>14</sup>。

『早稲田大学百年史』には、『日本帝国文部省年報』（大正9－昭和7年度）及び『文部省年報』（昭和13-23年度）をもとに、早稲田大学における「外国人」学生・生徒数と全国の諸学校のそれとを比較対照した統計、分析が記されている。それによると、留日学生のほとんどは、中華民国および満州国（昭和7年度以降）で構成され、全体の趨勢として次の4点を指摘している。(1)辛亥革命（1911）、対華21ヶ条（1915）などによる排日運動が理由で、大正期（1912-25）に留学生は漸減；(2)昭和に入ると増加に転じ、昭和5年度（1930）に小さなピークに達したものの、6年には満州事変があり7年度には激減；(3)昭和8年度（1933）からは、前年の第1次上海事件により「抗日救国」のため日本研究熱があがり、再度増加に転じ、11年度（1936）にこの期間の最高を記録した。昭和8年（1933）以降の対日為替相場好転も大きな要因と考えられる；(4)昭和12年度（1937）からは日中全面戦争となり減少し、17年度（1942）に一時増加を見せたものの、20年度（1945）まで減少したと説明している。また、昭和6年（1931）に満州事変が勃発してからインド、ビルマ、タイ等のアジア諸国からの留学生に加えて、アメリカ本土及びハワイ、カナダからの日系人子弟の留学も増えたとの記述もある<sup>15</sup>。

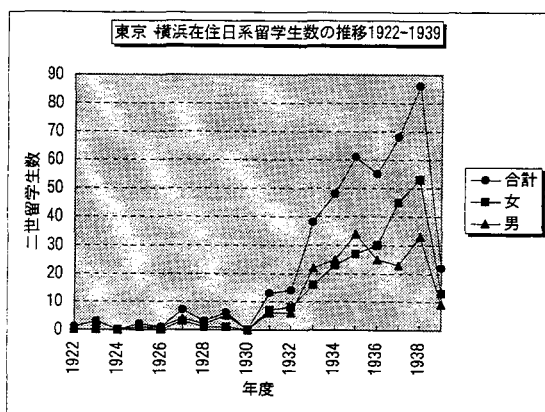
戦時下の留学生対策については、1931年の満州事変以降、満州、蒙古、中国（王兆銘政権下）、そして南方の留日学生対策が重視されていった。文部、外務、陸軍所轄の「満州国留学生会館」、蒙古留学生対象の「善隣協会」、東南アジア出身学生のための「国際学友会」などの創設はいずれもこの時期であった。1941年12月の真珠湾攻撃以降、留学生は翌年11月には大東亜省の統制下に統治されることとなった。そして、1943年に「南方特別留学生」が招致され、1944年12月には「留日学生教育非常措置要綱」が閣議決定された<sup>16</sup>。これによって大学在籍者の多くは京都大学に集められ、高等専門学校については、満蒙出身者は東北、中国出身者は京阪・山陰地方、南方は中国・九州に疎開させられた<sup>17</sup>。

このような留日学生の受入状況の中で、日系二世はどの時期に何人ほど来日したのであろうか。1933年、外務省の統計によると15歳以上の二世は3,920人、15歳未満は7,397人で合計11,317人と報告されている<sup>18</sup>。また、1938年には、日本にはおよそ4万人の日系人がいたと記している文献もあるが、正確な数字は把握できていない<sup>19</sup>。いずれにしても、これらの数字は、幼少から広島、沖縄、山口、和歌山など移民県を中心にいたいわゆる「帰米二世」を加えているので、純粹に留学生というかたちで高等教育機関に留日していた二世の数ははるかに少ない<sup>20</sup>。二世女子受入教育の代表的機関のひとつであった恵泉女学園の二世学生が国際文化振興会（現国際交流基金）の助成を受けて実施した『第二世調査』によると、東京、横浜周辺に居住していたのは約1500人であったとされている<sup>21</sup>。

日系二世による日本留学の諸要因については、すでに別稿で扱ったので詳細については繰り返さないが、簡潔にまとめると次のようになる。まず、二世の成長による留学適齢者の増加という点をあげておかねばならない。次に、一世の立場からは、二世に直接日本語・日本文化に触れさせることにより、世代間の狭間を埋めることへの期待があった。二世自身にとっては、就職難の解決策としての実的な面とともに、親からよく聞かされていた日本を見てみたい、また祖父母や親戚に会って

みたいという気軽な気持ちで来日した二世も少なくなかった。これらの送出要因に加えて重要なのは、円安といった渡航を有利にする経済的環境の変化が、日本留学をより身近で可能なものにさせた事実である<sup>22</sup>。また、満州事変、日華事変を契機とした「祖国」日本に対する関心の高まりが時代背景としてあった点も見逃せない。ジョン・ステファンは、ハワイ出身者に関しては、日本留学をした若者は、男女を問わず教育程度の高い家庭の出身者であったと述べている。また、ハワイ出身の二世は、日本の有名大学を卒業して帰ると箔がつき、ハワイの大学を卒業した者よりも上の地位につくこともあったようである<sup>23</sup>。いずれにしても、1932年までは目立った動きはなかったが、この年を境に急増していることがわかる(表2参照)。急増の主な原因は、前述した中国からの留学生の場合と同様、為替相場の変動が主たる要因であったと思われる。

表2 東京・横浜在住日系留学生数の推移1922-1939



出典：The Nisei Survey Committee, Keisen Girls' School, *The Nisei: A Survey of Their Educational, Vocational, and Social Problems*, 1939.より作成

年々増加する日系二世に対処するため、受入教育機関が1930年代から東京を中心に徐々に設立されていった。よく知られていた機関には、私立では、日米ホーム、日語文化学校、早稲田国際学院などがあり、政府関連では、敵之館、瑞穂学園があった。また、女性のためには恵泉女学園、武蔵野女子学院高等女学校、鶴見高等女学校などが門

戸を開いていた<sup>24</sup>。このうち、早稲田国際学院、敵之館、恵泉女学園について若干説明しておきたい。

早稲田国際学院は、1935年9月に早稲田奉仕園の事業の一部として創設され、以下の2つの目的があったという。「其の一は外国のハイスクールか大学を卒業したる者及日系外国人にして本邦の諸大学及専門学校に入学せんとする者に必要なる準備教育を施すのと、其の二は日本語及日本文化に関する知識を授け、日本精神の真意義を知らしむること」であったという<sup>25</sup>。1936年2月現在では、教員11名、学生53名で、在籍者のうち43名がハイスクール卒業者、10名が大学卒業者だった。入学目的別では、48名が大学、高等専門学校入学志望で、その大半が早稲田入学を希望するものであり、残り10名は日本語修得であった。出身地別では、北米23名、ハワイ22名で大半を占め、そのほかにカナダ、ジャワ、満州、オランダからの留学生も学んでいた<sup>26</sup>。1942年には在校生は約100名に達していた。しかし、その後戦時下にあって学生数は大幅に減少した。卒業生の中には大学進学する者の他に、二重国籍のために徴兵され入営した者も少なくなかった。また、就職先では、外務省調査課、満州電信電話株式会社などが含まれていた<sup>27</sup>。

外務省関連の敵之館は、1937年4月に外務省情報部長に任命された河相達夫の発案によって設立された。河相は、日本を世界に正しく理解してもらうための手段として、また日米の架け橋としての役割を演ずる人材育成を目的に、二世に奨学金を付与する教育機関の創設を提唱した。募集は1939年2月頃から米国本土及びカナダ太平洋岸とハワイの日本領事館で開始され、募集資格としてハイスクールを卒業し、30歳未満の者で、教育期間は2年間と設定された。授業料、食費、居住費の他に小遣いも支給され、卒業後の義務は一切なかった。同年12月1日に開校した全寮制の敵之館は、毎日午前9時から午後2時か3時まで授業があり、日本語の他に日本国憲法、国際法、日本史、政治、経済、漢文、礼儀作法などの科目があった。第1回生は16名で内14名が1941年11月30日、真珠湾攻撃のほぼ1週間前に卒業した。第2回生は翌月12月に22名が入学し、1943年に内18名が卒業した。その後、第5回生まで継続し、終戦と共に解

散となった。また、第1回生と第2回生は、外務省のラジオ室で短波の外国語放送の受信にあたった<sup>28</sup>。

恵泉女学園は、キリスト教女子青年会日本同盟総幹事として世界をめぐり、在留邦人と子女教育について直接話し合いをもつ機会があった河井道が創設した学園で、国際教育を教育方針のひとつにかかっていた。海外の一世から日本での二世女子教育を強く要請されたのを受けて、1935年9月に留学生科を特設した。外務省からも助成金を受け、新入生12名を迎えて国語以外にも生け花、作法、和裁、染色、料理などの科目が設置された。毎週金曜日には、市内各所の見学も組み入れられた。また、20人収容の留学生寄宿舎も翌年3月に完成し、普通部・高等部の日本人学生と生活を共にした。第1回卒業式は1937年7月に挙行され、9名が2ヶ年課程を、3名が1ヶ年課程を修了した。その後、第2回は7名が卒業し、1939年4月の入学者は、定員の30名を越えた。最後の留学生科卒業生は1942年の3名であった<sup>29</sup>。

### 留日米国日系二世

移民二世は、親から継承した文化と生まれ育った土地の文化の二文化の狭間に否応無しにおかれるが、ことに先祖の文化と受入社会の文化との距離が離れていればいるほど、マージナル・マンの特徴は顕著になる。さらに、日系二世は、一般のアメリカ人からはその肉体的特徴のためにアメリカ人としてみなされなかった。ストーンキストは、あるハワイの日系二世の言葉を引用している。

日本人は一世であれ、二世であれ疑惑のまなざしで見られているのです。白人を有利に、東洋人を不利にする不文律が厳然として存在するのです。要するに私たちはアメリカ人としてはみられていない。外人としてみなされ、いつまでたっても日本人でいると思われているのです。我々は親からみても外人なわけで、いってみれば「失われた世代」なのです。私たちの子どもの時代になれば、多少はましになるかもしれないけれど、我々自身の立場がかわるってわけじゃない。おそらく、異人種と結婚していけば多少の問題解決にはなるか

もしれないけれど、だからといって我々の世代がおかれた状況に変化はないのです<sup>30</sup>。

また、ストーンキストは、日本を訪れた日系二世女子に会った人物の話も紹介している。

私は最近、アメリカ生まれで、白人家庭で育ったある若い日本人女性の話を聞く機会を得た。その家庭は大学街にあって、彼女以外に二世はまずいないところだ。私は、彼女の話の聞きながら、彼女の血統を示すアクセント、振る舞い、あるいはイントネーションが何かでてこないものかと期待していた。しかし、結局、彼女の素振りの中に、東洋人の仮面の裏に潜んでいる東洋風の物の考え方を見つけ出すことはできなかった。私は日本人の仮面をかぶったアメリカ人女性と対峙しているような気がした。

数ヶ月後、私は彼女にまた会った。彼女は、最初の、そしておそらく最後の日本訪問を終えて帰国したところであった。彼女は、日本での経験については、あまり多くを語りたがらなかった。いくら日本に滞在しようと思っても、これ以上留まっていることは不可能であったといった。日本で彼女はまったく不利な立場に立たされていたのだ。日本人の顔つきをしていながら、日本語は話せない。それに、彼女の服装、言葉使い、全てが彼女は本当はアメリカ人であるという事実を暴露していた。その異常さが日本人にとっては、恥ずべきことで、薄気味悪くさえあったようなのだ。その物珍しさから、通りを歩けば、彼女の後をついてくる者も一人二人ではなかった。排日土地法が議会を通過したばかりだったということもあってか、当時の日本人は、アメリカ人のふりをした日本人女性の出現を奇異な眼差しでみていたのである<sup>31</sup>。

日米の狭間におかれた日系二世が、日本に赴いた時に起こるマージナリティを例示したストーンキストは、マージナル・マンのひとつの典型例をそこに見出した。二世は、「帰化不能外国人」の烙印をおかれた親から生まれながら、米国で生まれたという事実ゆえに米国籍を取得した。そして、その大多数がパブリックスクールでアメリカ流の

教育を系統的に受け、一方で放課後や土曜日には日本語学校で日本語・日本文化を教授された。もちろん、このような一般化から漏れる個人は存在した。国籍の有無を問わず意識面での帰属性という点において真に「東西融和」の実現を目指した一世指導者の存在も忘れてはならないし、人格形成期の大半を日本で過ごした帰米二世の中には、自らの意志で日本国籍を選んだ者もいた。しかし、「マージナルなパーソナリティは、自分の意志とは別のところで二つあるいはそれ以上の異なる歴史的伝統、言語、政治的忠誠、道德規律、あるいは宗教に組み入れられた人々の中に最も明白な形で見出される」といったストーンキストのカテゴリーに、日系二世の多くは見事に合致していた<sup>32</sup>。

ロバート・オブライエンは、来日した二世の落胆の声をいくつも拾いあげている。1年半日本で過ごした後に帰国したシアトルのある二世女子は、アメリカで日ごろ味わう偏見に嫌気が差して日本に渡ったが、日本で受けた差別待遇はアメリカのそれよりもさらに悪質なものであったと語り、帰国して安堵の胸をなでおろしたという。また、東京 YMCA の二世代表は、アメリカの一世に、日本においてもまともな就職の機会は与えられないので二世を日本に大量に送らないようにと進言している<sup>33</sup>。また、オブライエンは、ストロングが実施した二世の就職状況に関する研究についてふれている<sup>34</sup>。調査対象となった634人のカリフォルニア在住の二世高校生に、仕事と生活の場として日米のどちらを好むかと質問したところ、日本を好むと答えたのは、わずか2.4%、米本土と答えたのは90%に達したと報告している。同様の質問を二世大学生（被験者数不明）にむけたところ、日本3.7%、米本土77.6%、14%はどちらでも可、4.7%はハワイ、カナダ、ブラジルのいずれかと答えた<sup>35</sup>。

日本海軍軍士官になったある二世について調べた立花譲は、当時の在日二世の多くは本質的には日本での生活があわず、日本人に対する不満が鬱積していたが、アメリカの両親には気を使っていいことばかりを手紙で書き送っていたと述べている。数多くの二世は来日したその日から拒絶反応を示し、日本語ができないこともあって、ものの三ヶ月もたたないうちにアメリカに帰りたいとい

いだす者も少なくなかったとも記している<sup>36</sup>。男性はカーキ色の国防服、女性はもんぺ姿という景色の中にとけ込むことは、自由の国アメリカから来た若者にとっては容易ではなかったにちがいない。また、移民を棄民として扱う日本人の差別観、また物質的によりよい生活環境で生まれ育った者への嫉妬、偏見、蔑視の対象となった二世に「祖国」を尊ばせるのは無理な注文であった。

しかし、日米開戦も間近になってくると日本の立場を弁明する二世もいた。1941年12月に書かれた「戦争と私」という題の、ある二世女子による作文では、次の様に語られている。

この度の日支事変が始まった当時、私はまだ遠い米国に居て、日支開戦の理由については少しも存じませんでした。両親達が毎日日本の新聞を読んで議論したり戦地に送る慰問袋をつくったりしているのを遠方から眺めているだけでした。

白人学校に行けば、先生も学友も皆支那鼻眞で、日本は悪い国だと侮辱し、新聞の論調までその通りですから自分自身に日本の態度を疑ふ傾向が湧き出て来ました。（中略）

さて、実際に日本に上陸して見れば何事も新聞の記事と正反対であるのに驚きました。（中略）生活の内部に入れば矢張り挙国一致して東亜の新秩序建設の為の苦心と抱負とを保っていることが今になって分かりました。（中略）若し私が男子でしたら、日本の為に何処までも戦ひたいです。残念にも女ですから実戦に参加することは出来ませんが、女に出来る他の面で活躍したいと思ひます<sup>37</sup>。

少なくとも教師の検閲を通った上での意見であるので、当時の世相を考慮に入れば多少割り引いて考える必要もあるだろう。しかし、挙国一致の世情にあって、二世の中には日本人としての立場を強めた者も少なからずいた一例ととしてよからう。

戦前・戦時下の留日米国日系二世の心境を知るには、メリー・トミタ著『ミエへの便りー日本から故郷への手紙、1939-1946』(Dear Miye: Letters Home from Japan, 1939-1946)が、マージナル・マンの立場にたたされた個人のライフサイクルを



知るうえでも貴重な史料を提供してくれている。同著は、カリフォルニア出身の二世女子メリーが、1939年から1946年までの第二次世界大戦を挟んだ8年間に友人のミエとケイに書き送った手紙を収録したものである。

手紙の主であるメリー・トミタは、カリフォルニア州の小さな農村で和歌山県出身の父親と山形県米沢出身の母親の間に次女として生まれた。地元の短大で2年間学んだ後、メリーはサンフランシスコ近郊の裕福な家庭でメイドとして1年間働き日本への旅費代を稼ぐと、1939年6月横浜に向けてサンフランシスコを後にした。兄弟の中にすでに日本留学をした者もあり、また就職の条件をよくするためあって、日本留学はごく自然な帰結であった。日本では、母親がかつて所属していた力行会の永田会長宅で、永田家の5人の子もたちとともに寝食を共にすることになった。当時二世の受入教育機関は東京都内を中心に数箇所あったが、メリーは兄のジョージも通った早稲田国際学院に入学した。活発で男勝りなメリーは、同学院の剣道部に入部し、女性剣士第一号となった。カリフォルニアの一農村出身の彼女の目に映る東京は、大都会で活気に満ちあふれていた。すでに中国と戦火は交えてはいたものの、銀座通りは夜遅くまで灯かりが消えない喧騒な都会で、ついつい帰宅が遅くなる日も少なくなかった。しかし、早稲田国際学院での日本語や他教科の勉強はけっして楽ではなかった。2年間学んでもいっこうに上達しない日本語能力に苛立ちさえ覚え、そのことが米国への帰郷を遅らせる理由のひとつにもなった。日米開戦が噂される中、1941年12月、メリーは横浜発サンフランシスコ行きの客船龍田丸の船上にいた。しかし、龍田丸の航海中に真珠湾攻撃は決行された。船は船先を日本へ向きなおし、以降苦しくて長い5年にわたる歳月が日本でゆっくりと流れていった。

1941年9月を最後に家からの仕送りもなくなっていたメリーは、終戦まで自活の道を歩む。世話になっていた永田家も貧困にあえぐ状態の中、メリーは自ら家を出てある医者家に居候する。その際、米の配給にありつくために、父方の戸籍に入籍したが、このことが後に、米国籍剥奪を招く

ことになってしまう。寄宿先では、メリーは召し使いの様な待遇と日本海軍大勝利の報告を日々聞かされることで精神的に不安定になる。幸い、早稲田国際学院を卒業後入学した東京女子大学の教員のはからいで2ヶ月後には女子大寮に移り住み、そこで戦時中の大半をすごすこととなった。

戦争は長引き、反米感情が高まる中、敵性語である英語を公には喋れず、二世であることをひた隠しにして生活する毎日だった。1944年9月に大学を卒業したが、栄養失調で黄疸にかかってしまう。また、就職のあてはなかった。そこに、二世に懇意だった女子大の同級生から兄弟の見合いの話をもちかけられ、結婚する。しかし、結婚生活は惨澹たるものだった。ほとんど話しかけることをしない夫、伝統的日本の妻を演じることを強要する姑。また、夫は上海などへの出張が重なった。そして、1945年3月、東京空襲による疎開を機に、メリーは嫁入り先への入籍を断られ500円を渡されて、和歌山の親戚のところへと赴く。

和歌山の親戚は貧困生活の渦中にありながら、メリーを不憫に思い、快く受け入れてくれた。また、和歌山では女子大時代の二世の友人ケイと再会した。終戦を迎えると、二人で大阪に引越し、アメリカ赤十字で働いた。しかし、赤十字でも、白人女性の上司の差別的待遇と米軍政府のもてで来日した二世兵士の留日二世を見下す態度に我慢がならなかった。後に、ケイは東京での大学生活を再開し、メリーは京都に移って米軍の監軍局長、そして従軍司祭のもてで働くことになる。ケイとの文通の中では、日本人のことを“Jap”と蔑み、日系であることの再認識と日本人との差別化をはかった。それは、マージナルな立場におかれた二人が日頃の鬱積した情緒を解放することの出来る、せめてものカタルシスの行為であった。しかし、一方で「アメリカ人」と呼ぶ場合、白人のアメリカ人を念頭におくようになり、自分を含めた日本の日系人は、日本人でもなくアメリカ人でもない所属不明の人間としてアイデンティティーの亀裂を経験している。当時を振り返り、著者は次のように述べている。

若い米国日系人女性として、私は様々な問題に

直面していました。人生の意義とは何か、私はどうやったらうまくやっていけるのかと思悩んでいました。一番の問題はアイデンティティの問題でした。私はいったい何者なのだろうか？日本人なのか、アメリカ人なのか。日本へ行く前は、私は学校の友達とのつきあいだけでした。おおむね偏見や差別からは身を守られていたといっているでしょう。日本では、私は日本人とずいぶん違うこと、そして日本人に受け入れられないことに驚きをおぼえました。次第に私の育った環境が私を日本人よりはアメリカ人にしていたことに気がつきました<sup>38</sup>。

しかし彼女は、他の二世にたいしても距離をおいていた自分に気がついていました。それは、自己嫌悪であったのかもしれないとも述懐している。また、当時の自分が日本の他の社会的弱者や米国における同様の、あるいはそれ以下の立場におかれた人々にほとんど関心を示さなかった点には自省の念を抱いている。

以上みてきたように、来日してから帰国するまで故郷の友人ミエと日本在住のケイ宛に書き綴った手紙は、戦前・戦中マージナル・マンとしての状況下にあった二世の心理状態を示すひとつの事例として恰好な資料を提供している。様々な排日法の渦中に育ったメリーではあったが、カリフォルニアの小村では直接差別を受けることは少なく、比較的良好な関係を近隣のポルトガル移民家庭と維持していた。日曜には日系キリスト教会で一日を過ごし、ミエともそこで知り合った。地元の短大では植物学に関心を示し、卒業後にはカリフォルニア大学に進学することも考えた。しかし、就職の見込みはほとんどないことがわかっていたため、日本への留学を決めたのだった。この間のメリーには、マージナル・マンとしての心理的葛藤はとくに認められない。そして、来日当初も、文化的葛藤を自覚し二つの自我にさいなまれたような様子は、手紙の文面にはあらわれずにこない。実際、授業が終わるとすぐさま銀座界隈を訪ねてコンサート、映画等の娯楽を楽しむという、大都会東京の物珍しさに惹かれた日々の様子がミエ宛の手紙には綴られている。しかし、やがて日米開戦

が巷で噂されるようになってくると、二つの国家に挟まれた状況を自覚しないわけにはいかなかった。真珠湾攻撃、不幸な結婚生活、戦時下の貧困、そして米国籍の消失(後に回復)。この間は、明らかに危機的段階におかれて不安定な精神状態にあった。鬼畜米英の世論のさなかにあって、日系二世に対する偏見は強まり、しかしそのことがかえって彼女の米国への帰属性を明確にさせてもいった。

メリーの歩んだ険しい道は、彼女だけのものではなかったようである。昨夏、インタビューしたロサンゼルス在住のCさんは、メリーの経験と多くの点で重なりあう体験をした。Cさんは、1938年6月にロサンゼルススのハイスクールを卒業後すぐに来日した。日本語・日本文化に触れるために、また母親が先に日本に一時帰国していたこともあり、同年9月に恵泉女学園に入学し、留学生科で2年間学んだ。恵泉女学園では、日本語や算盤の他に生け花、作法、和裁、料理なども習い、総じて楽しい学生生活を送った。1940年には2年間の修業を終え、無事卒業した。卒業式には米国から姉が来日し、日本に帰国していた母親と共に米国へ戻った。Cさんは、しかし、横浜正金銀行に就職先が見つかったので日本に残り、頭取のタイピストとして働いているうちに日米開戦を迎え、米国に帰国できなくなってしまった。戦時中知り合った安田銀行勤務の男性と結婚し、やがて男児を授かるが、徴兵された夫はビルマで戦死。夫の死後、姑に家からでていくように言い渡され、山梨の親戚に息子を預け、東京で働く日々が続いた。終戦直後は、進駐軍の通訳として日本橋で生活費を稼ぎ、週末に息子に会いに山梨の親戚のもとへ行くという生活が続いた。進駐軍の将校に米国への帰国をすすめられ、息子も連れて行こうとしたところ、大使館の許可がおりない。再三申請したが、日本国籍の子どもにパスポートはおりず、ひとまず自分だけが米国へ帰国し、米国から息子と呼び寄せることにした。1948年、Cさんは10年ぶりに祖国アメリカの土を踏んだ。その間、子どもは山梨の親戚に預けられ、姉が毎月100ドルの仕送りをしてくれた。結局息子は中学を出、山梨の親戚の本家が大学卒業まで面倒をみってくれることに

なった。大学の理工学部を優秀な成績で卒業した息子は、大学院をロサンゼルス南カリフォルニア大学で学び、成人して初めて母親との再会を果たす。息子との再会を喜んだCさんではあったが、長くは続かなかった。息子はやがておなじく米国に留学していた日本人女性と結婚した。しかし、卒業後は一人娘である妻の実家の事情で、秋田に行ってしまった。

カリフォルニア州中部のフレズノ生まれの二世と再婚したCさんは、数年前に日本を訪れた。戦後の復興から著しい発展を続ける第2の故郷日本を見て安心した反面、訪れる先々で戦中・戦後の日本でのつらい日々が思い出されて、予定を切り上げて日本を早くに発ってしまった。Cさんは、世話になった親戚には感謝の念は深く抱いているものの、日本で味わった心理的葛藤はいつまでも忘れられないと語る。留日中、Cさんもメリーのように、米国の姉宛に多くの手紙をしたためていたという。しかし、残念なことに最近まで姉が大事にとっておいてくれた手紙は総て焼却してしまった。やはり、Cさんにとっては忘却の彼方へ追いやってしまいたい過去の暗い出来事であったのかもしれない。

来日した多くの二世が疎外感や偏見を感じたことはすでにみてきたとおりであるが、しかし、留日生活がすべて否定的な側面ばかりであると速断してはなるまい。米国では経験不可能なことを日本で味わえる場合もある。ダニエル・沖本は、1967年から3年間大学院生として留日体験したが、そのときの様子を『仮面のアメリカ人』に記している。その中で彼は「人種的匿名性」について次のように述べている。

自分がみんなとちがって見えることを気にしないで、人ごみのなかだろうと田舎のあぜ道だろうと、胸を張って歩けるというのは大変な解放感である。(中略)私は日本へ来て住んでみるまで、アメリカでは歩き回るといった単純な動作でさえ、自分の人種を意識させられ、そのことをはずかしいと思込まれていたことに、はっきりとは気づいていなかったのだ<sup>39</sup>。

そして、自分が目立たないという心理的解放感から解かれた「ぜいたく」に酔いしれるあまり、外国人に見えるというのがどんなことなのかを忘れてしまうほどであったという。戦前と戦後の時代の相違は多少あるにせよ、沖本の抱いた解放感と類似の感情を戦前・戦中留日していた二世も味わったに違いない。

とはいっても、やはり二世という「外人」でも「日本人」でもない二分法からはみ出した「半外人」としてのマージナル・マン状況に変わりはない。彼自身「アメリカ人」とも「外人」とも呼ばれたことがなく、「二世」あるいは「日系人」としか呼ばれなかったと述べている。また、英字新聞に「求む、英会話教師——アメリカ人、カナダ人、二世も可」といった求人広告にも、二世の「半外人」性、即ちマージナル・マン性があらわれていると沖本は指摘する<sup>40</sup>。

## 結 び

ジョン・オカダは『ノー・ノー・ボーイ』の中で真珠湾攻撃直後の日系人のおかれた立場を主人公イチローの口を借りて次のように語らせている。

アメリカ国民の怒りと憎しみと愛国心は、自分たちの国土をよごした日本民族へのはりさけんばかりの非難の声になった。アメリカ人として生まれた日本人は、愛国心で生物学を変えることはできないので、もはや自分がジャパニーズ・アメリカンなのか、アメリカン・ジャパニーズなのか悩むこともいらなくなった。あきらかに日本人だった。自分たちの母親が日本人で父親が日本人で、兄弟姉妹が日本人であるのとまったく同じだった<sup>41</sup>。

「祖国」で境界線上にあった米国日系二世は、親の「祖国」へと強制的に放出された。しかし、それはマージナル・マンとしての存在意義の消滅を意味したわけではない。なぜなら、彼らは日本人ではなかったからだ。むしろ、拒否されることによって、マージナル・マンとしての位置をより確固たるものにしようと言っているように思われる。

本稿では、マージナル・マンという巨視的視点

から、1930-40年代の留日米国二世学生という微視的な歴史上の出来事を取りあげた。マージナル・マン概念は1920年代にパークにより提唱され、ストーンキスト、ゴールドバーグ、レヴィンらによって継承されていったが、1960年代以降の社会学の主要問題とはならなかった。折原は、この辺の事情について、1924年の移民法以降、移民が急激に減少したことや、ムラトリーの規制措置によってマージナル・マン的問題の展開を促す現実の刺激が相対的になくなってきた点を反映したものであると述べている<sup>42</sup>。しかし、混血化が進む現代社会においては、マジョリティー対マイノリティーといった二極分化の図式では現実を把握しきれないのも事実である。米国のセンサスにおいて multiracial という新たな人種カテゴリーを設定させようとする近年の動きは、この状況を反映した一例であろう。このような人種的雑種状況と共に、交通・情報手段の発達にともなう人々の移動は、近年益々マージナル・マン的個人を増殖させている。例えば、日本における在日朝鮮人・韓国人二世のおかれた立場は、本稿で扱った留日二世のおかれた状況と多くの点で重なり合っていると見てよからう。

ある者は永続的に居座り、ある者は上位あるいは下位集団へと居場所を見いだす境界線上の時空を浮遊する人々の存在とそのダイナミズムをとらえる意味において、マージナル・マン概念は有効であり、また留日日系二世のおかれたような歴史的状況における事例を扱う場合においても有用であろう。しかし、一方でマージナル・マン概念の検討課題は少なくない。例えば、混血化や多民族性、多文化性を負の遺産とするのではなく、むしろ積極的に捕らえようとする近年の動きの中では、パーク、ストーンキストのマージナル・マンは、負の位相を強調しすぎているきらいはあろう。また、マージナル・マン概念の人種的、文化的雑種すべてを含んだ網羅的要素ゆえに、グロヴェンスキーが指摘するように、その最も拡大した解釈においては「ステレオタイプに基づいた社会学的フィクション」になる危険性はある<sup>43</sup>。今後は、ストーンキストのライフサイクルの類型化に関する考察を深めるとともに、様々な事例の検討を課題と

していきたい。

## 註

1. Robert E. Park, "Human Migration and the Marginal Man," *American Journal of Sociology*. 33.6(1928):881-93; Everett V. Stonequist, *The Marginal Man* (New York: Charles Scribner's Sons, 1937) viii-xviii.
2. 岡堂哲雄編『社会心理用語事典』(至文堂, 昭和62年)308頁; 見田宗介他編『社会学事典』(弘文堂, 昭和63年)826頁; 森岡清美他編『新社会学事典』(有斐閣, 1993年)1369頁。
3. 赤坂憲雄著『異人論序説』(筑摩書房, 1992年)18-19頁。
4. Stonequist 120-138.
5. 佐藤嘉一「マージナル・マン」森岡他前掲書, 1369頁。
6. 折原浩著『危機における人間と学問-マージナル・マンの理論とウェーバー像の変貌』(未来社, 1969年)66頁。
7. 永井道雄他著『アジア留学生と日本』(日本放送協会, 1973年)27頁。
8. 『早稲田奉仕園』第48号, 昭和11年2月15日, 2頁。
9. 1924年の日本政府による国籍法改正をもって、出生後14日以内に領事館に届け出ない者は自動的に日本国籍を消失し、問題は一応の解決をみた。
10. 森本豊富「第二次世界大戦前における米国日系二世の日本留学事情」『駿河台大学論叢』第11号43-65頁。
11. Robert W. O'Brien, *The College Nisei*. (Palo Alto, CA: Pacific Books, 1949).
12. カリフォルニア州の中でも特定の大学に入学する傾向があり、8人中5人は、次のいずれかの大学に所属していた University of California (Berkeley and Los Angeles), University of Washington, San Francisco Junior College, Los Angeles City College, Sacramento Junior College, Pasadena Junior College, San Jose State College, The University of

- Southern California. (O'Brien 110参照)。
13. O'Brien 115.
  14. さねとう・けいしゅう著『中国人日本留学史』(くろしお出版, 1960年) 15頁。さねとう・けいしゅうは、日本留学増加の諸理由として、(1) 1894-5年の日清戦争による敗北によって、教育の普及と法律による政治の整備の必要性を実感；(2)遅れた近代化を早急にすすめるため、直接西洋から学ぶよりは、西洋から学び不必要な点は切り捨てた日本の学問を学ぶ方が効率が良いとの判断；(3)日本語は、発音数が少なく、文法が疏濶で、名物象事が中国と重なるところが多く、漢字が全体の10分の6から7を占めているといった学習上の利便；(4)風俗習慣の類似性；(5)両国間の距離；(6)比較的安価な旅費、生活費などの点をあげている。
  15. 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』(早稲田大学出版部, 1978年) 623頁。
  16. 南方特別留学生は、戦時下の1943年、翌44年に200名を超す留学生から構成されていた。留学生の出身地は、当時日本占領下にあったインドネシア、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、フィリピン、タイ、ミャンマーで、全国の専門学校、陸軍士官学校、大学で学んだ。インドネシア出身の留学経験者へのインタビューをまとめたものに、倉沢愛子著『南方特別留学生が見た戦時下の日本人』(草思社, 1997年)がある。
  17. 永井前掲書, 94-95頁。
  18. 外務省外交史料館 K.1.1.0.9「本邦ニ居住セル米加出生日系人数調ノ件」『日系外人関係雑件』
  19. ジョン・J・ステファン著、竹林卓監訳『日本国ハワイー知られざる“真珠湾”裏面史』(恒文社, 1984年) 76頁。
  20. 帰米二世については、様々な定義がなされているが、広義には日本で教育を受けた二世で帰米した者をさす。しかし、一般的には、日本の小・中学校を経験し、日本語・日本文化の影響を多分に受けた後に帰米した二世を意味する。したがって、アメリカのハイスクールを卒業した後には日本の高等教育機関で短期間学んだ留学生は、本稿では帰米二世とは区別する。
  - (O'Brien 125.参照)
  21. The Nisei Survey Committee, Keisen Girls' School, *The Nisei: A Survey of Their Educational, Vocational, and Social Problems*, 1939.卒業共同研究として実施された当調査は、日米協会、外務省、公使館、二世クラブなどの援助を得て、東京、横浜近郊在住の二世の住所を調べ、1,141部の質問書を送付した。内437通の回答を得た。質問事項は性別、出身地、来日の目的、学歴、将来の目標などに関するものを含んでいた。また、結果はアメリカへも海外放送された。
  22. 山下草園著『日米をつなぐ者』(文成社, 1938年) 319-321頁。
  23. ステファン前掲書, 76頁。
  24. 森本前掲書, 53-54頁。
  25. 『早稲田国際学院』第10号, 昭和13年3月5日, 3頁。
  26. 『早稲田奉仕園』第48号, 昭和11年2月15日, 3頁。
  27. 『早稲田国際学院報』第24号, 昭和17年2月27日, 3頁。
  28. 池田徳真著『プロパガンダ戦史』中公新書, 1981年, 19-28頁。
  29. 恵泉女学園編『恵泉女学園50年の歩み』(恵泉女学園, 1979年) 112-123頁。
  30. Stonequist 103-104.
  31. Stonequist 104-105.
  32. Stonequist 3.
  33. O'Brien 14.
  34. Edward K. Strong, Jr., *Second Generation Japanese Problem*. (Stanford: Stanford UP, 1934) 230.
  35. O'Brien 15. 恵泉女学園が行った調査 *The Nisei* では、男子の21パーセントが日本永住を希望しており、女子は7パーセントという結果がでている。
  36. 立花譲『帝国海軍士官になった日系二世』(築地書館, 1994年) 112頁。
  37. 『早稲田国際学院報』昭和16年12月20日, 2頁。
  38. Mary Kimoto Tomita, *Dear Miye: Letters Home from Japan, 1939-1946*. (Stanford:

Stanford UP, 1995) vii-viii.

39. ダニエル・I・沖本著, 山岡清二訳『仮面のアメリカ人: 日系二世の米国観と日本論』(Daniel I. Okimoto, *American in Disguise*. Weatherhill, 1970) (サイマル出版会, 1971年) 191-192頁。
40. 同掲書, 196-197頁。
41. ジョン・オカダ著, 中山容訳『ノー・ノー・ボーイ』(John Okada, *No-no Boy*, 1976) (晶文社, 1979年) 17頁。
42. 折原前掲書, 62頁。
43. David I. Golovensky, "The Marginal Man Concept: An Analysis and Critique," *Social Forces*, 30.3(1952):335.

\* 本稿は, 早稲田大学特定課題研究(1997年度: 個人研究) の助成を受けて執筆されました。